

外交とインテリジェンス

— 「国際社会と法」に関連して —

兵 藤 長 雄

まえおき

- 1 外交とインテリジェンス — 個人的体験から
外務省志望の動機
英国陸軍学校での研修
モスクワでの体験
 その1 仕掛けられた罠
 その2 渡りかけた危ない橋
- 2 外交とインテリジェンス — わが国の場合
外務省の体制
他の関係省庁の体制
冷戦構造崩壊後の対応
 米国の場合
 わが国の場合
 ビジネスインテリジェンス
- 3 国家の指導者とインテリジェンス
 ブラント西独首相辞任事件
 プロフェューモー英国国防大臣辞任事件
 わが国元首相への疑惑

おわりに

まえおき

ただいま福岡先生から過分なご紹介をいただきましたけれども、今日は公開講義ということで受講生のほかに、わざわざ私の講義を聞きに来てくださった学内、学外の方々に心からお礼を申し上げたいと思います。

さて、時間も限られておりますので早速始めたいと思いますが、ご紹介にありましたように、この1年間、学生の皆さんとは「国際社会と法」という授業科目でいろいろ勉強してきました。現代法学部の特色は、ほかの大学の国際法の講義と違って、できるだけ実践と結びついた講義ということだと理解をいたしまして、私も「実証的国際法」という授業表題を掲げて、国際法だけを勉強するのではなくて、現実の国際社会に起こった裁判の判例も含めたいろいろな事例、そしてその中に私の体験も交えて1年間勉強してまいりました。今日は最終講義ということですので、教科書を離れて、ある意味では国際法という領域を越える問題を皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

1 外交とインテリジェンス — 個人的経験から

皆さんにお配りした講義メモに沿って話を進めたいと思います。題を「外交とインテリジェンス」としました。では、インテリジェンスとは何だというご質問がすぐ出ると思うのですが、これは大変難しい問題でございまして、私があえてこの「インテリジェンス」という横文字を使いましたのは、正確な日本語の訳語はないと思うからです。インテリジェンスという言葉は、情報、インフォメーション、つまり知識という意味でも使われますし、あるいは組織、CIAとかKGBとか、組織を念頭においてインテリジェンスという言葉を使っている、そういう方もおられます。あるいはスパイ、諜報ですが、「007」とか、皆さんもいろんな映画その他でお

なじみだと思います。そういうスパイ、諜報といったもの、あるいはその諜報に対するカウンター・インテリジェンス、防諜といいますが、そういうことも念頭に置かれる方もおられると思います。いろいろな面が一緒に入った言葉であります。今日はこれ以上言葉の詮索はやめまして、そういうこと全体を念頭に置きながら、このインテリジェンスという問題を考えたいと思います。

外務省志望の動機

まず私の個人的な体験から話を始めます。なぜかといいますと、私はこのインテリジェンスという問題と、非常にかかわり合いを持ちながら外交官生活40年を送った一人ではないかと思うからです。それはなぜかを説明するには私が外務省に入った動機をお話ししなければなりません。私が大学におりましたのは1950年代後半の時代でした。冷戦が大変厳しくなっていく時代でした。私がおりました大学もそうですし、ここ本学もそうだったと思いますけれども、当時はマルクス・レーニン主義イデオロギーの全盛時代でした。私がおりました大学でも、マルクス経済学やマルクス史観に基づいた講義を受けました。そういう中で当時、私がそういう先生方からたたき込まれたことの一つは、要するに社会主義、共産主義イデオロギーに基づいたソ連というものが、人類の理想的な社会に向かって進んでいる。一方、アメリカ——当時は、こういう先生方はアメリカ帝国主義と言っておりましたけれども、皆さんも、あるいはレーニンの『帝国主義論』をお読みになったかもしれませんが、資本主義が高度に発達して帝国主義段階になっていくと、矛盾がだんだんと噴き出す、その矛盾が戦争をひき起こすということで、平和勢力ソ連対戦争勢力アメリカというような考え方が横行した時代でありました。

しかし、大学の講義で聞くソ連についての先生の話と、それから、NHK、新聞等を見たときにいろいろ伝わってくる話、例えばハンガリー

動乱の報道を見ていると、話がどうも少し違う、ギャップがあるということ私としては感じ始めました。そこで、学生ながらに、マルキストが強調する理想を旨とする社会というものを、自分のこの目で見てみたいという欲望に駆られるようになりました。当時は、小田実という人が『何でもみてやろう』という本を書いてベストセラーになった時代であります。私もソ連を自分自身の目で見てやりたいという気持ちが強くなりまして、どうしたらソ連に行って勉強できるかと考えました。

当時は、やはり共産党、または社会党の後押しがないと、例えばモスクワ大学に留学するという道は、まず不可能という時代でありました。それで、手っ取り早いのは外務省に入って、モスクワの大使館に行くことだと考え、外務省の試験を受けました。1回目は落ちまして、留年をして2年目に入りました。そういう経緯があるものですから、外務省から合格通知を受けて、まだ外務省に入る前に、外務省の人事課長とのアポを取りまして、会いに行きました。「実は私、外務省に入るのはソ連の専門家になりたいからなので、入省すればソ連の専門家にならせていただけませんか」と、こういうことを聞きに行ったのです。その当時の人事課長は須之部という、大変立派な大先輩でしたけれども、話を聞いていまして、「いや、君にソ連の専門家になれるとここで約束するわけにはいかない。しかし、君の話と熱意はわかった、それ以上は言えない」という返事でありました。結局、この立派な大先輩が「君の気持ちはわかった」と言ってくれたこの言葉にかけて外務省に入ったのです。

英国陸軍学校での研修

そうしたら、この人事課長からお呼びがありまして、「君があれだけ熱心にソ連の専門家になりたいということであったので、君の希望どおり、なってもらうことにした。ついては、これまでだれも日本から行ったことのない英国の陸軍に君は行ってもらう」と言われて、私は度肝を抜かれた

わけです。外務省に入ったのに何で英国の陸軍に行くのか。私の同僚がオックスフォード、ケンブリッジ、エディンバラ大学に向かった時、ひとりだけ英国陸軍の特殊学校といわれるところに行ったわけです。

そこには英国陸軍の19の各部隊から選り抜かれた、ちょうど私と同じような20代中ごろの若手将校、レフテナントやキャプテン、日本でいえば少尉、中尉、大尉ぐらいの人でしょうか、が集まっていました。そこで、缶詰になって朝から晩までロシア語とソ連についての勉強、ソ連の歴史、ロシアの歴史、文学、地理等、つまりソ連についての予備知識をたたき込まれました。入学してみて私も判ったのですけれども、これは英国陸軍の、まさにインテリジェンスの専門家、将校を養成する特殊コースの前段階の基礎コースでありました。ここで1年、ロシア語などをたたき込んでコースをパスした人は、全く別のところで、いわゆる本当のインテリジェンス・オフィサーの訓練を2年間受けるということになります。その2年間のインテリジェンスコースについては、それがどこにあるのか、何をするのか極秘でしたから、私は足を踏み入れたことは一度もありませんでした。それが、私がインテリジェンスという世界の入り口に立った最初の経験であります。

モスクワでの体験 その1——仕掛けられた罠

それが終わってロンドン大学でロシア語等の勉強を1年間続けた後、モスクワに参りました。モスクワは西側から見れば、まさに冷戦時代のインテリジェンスの本場であります。そこで私は、入り口ではなくてインテリジェンスという世界を個人的に体験することになったのです。それはいろいろなことあるのですけれども、今日は学生の皆さんにイメージしていただくために、エピソード的に二つばかりお話しようかと思います。メモに「モスクワでの体験——仕掛けられた罠」と、ちょっと俗っぽい表題をつけました。それはどういうことかということから、まずお話してみたい。

当時、私はまだ若かった。それでモスクワからレニングラード、今はセントペテルブルグと呼ばれていますけど、当時はレニングラードと呼ばれていました。そこに行くには「赤い矢」と呼ばれた夜行特急列車で行くというのが、外国人に指定されたコースでありました。「外国人に」というのは、当時は外国人はみんなモスクワに缶詰になっていたわけですから、モスクワの中心から40キロ以上の外に出るときには48時間前に、ソ連外務省の外国人世話部というところに、許可を申請するというのが規則でありました。そして申請が許可されたら、今度は自分で予定をアレンジするのではなくて、外務省の外交団世話部というところが、「あなたはこういう汽車で行きなさい」という手はずをやってくれるのです。ですから、私がさっきレニングラードに行く「赤い矢」の夜行列車で行ったというのは、私にとっては選択の余地がないわけです。「これで行きなさい」と言われて、切符と寝台券をもらった、こういうわけであります。

そこで私は、夕方その夜行列車に乗って、自分にあてがわれた1等寝台のコンパートメントを探す。探し当てた個室には上下二つのベッドがありまして、もう一人来るのかな、来ないのかなと思っていたら、汽車が発車したらバタバタと、金髪のすごく若い胸の張った、妙齢の女性が私の部屋に飛び込んで来たのです。私もびっくりしまして、幾らソ連でも2人の寝室コンパートメントに、男女一緒に入れることはないと聞いていたものですから、間違えたのではないかなと思って、「済みませんが、お間違えではないですか？　これが私の切符ですけど、これはこういうコンパートですよ」と言ったら、女性が自分の切符を見せて、「このとおりだ。これが私のコンパートメントで、私は上のベッドですよ、あなたは下だ」と、こういうわけですね。それで私もびっくりしまして、これはえらいことになったなと思いまして、「ちょっと待ってくれ」と言って、車掌を探しに行きました。車掌に、「実は私のコンパートメントは女性と同室で、ちょっと具合が悪いので、私を移すか、女性を移すかしてくれないか」と言っ

たら、その車掌は一応形式的に、列車の予約状況か何か見ていたのですが、「きょうは満席なんだ」というわけです。「どこにも空いたコンパートメントはない」と言うのです。で、私にウィンクしながら、「いいじゃないか、若い女性が来たのならどうぞお楽しみを」と言って、取り合ってくれないわけです。それでその時に私がわかったのは、この車掌も実はソ連の当局とグルだな、もうちゃんと言いくるめられているのだということです。

いや、困ったな、どうしようかなと思って部屋に帰りましたら、その女性はえらく薄着になって、何かを飲んでいるわけです。私が行ったら、「どう？ 1杯飲まない？」とお酒を差し出されたのです。私は、冒頭にお話した英国のインテリジェンス・オフィサーのコースにおりましたので、いろいろ間接的にインテリジェンスの世界の話というのは聞いていたのです。英国の外交官がどうやってはまったかとか、そういう話も聞かされてきましたので、「ああ、この女性はもう100%間違いなく当局が差し回した女性だな」と、私もびんときましたので、「いや、私はアルコール飲めないんだ」と言ったのです。「それではソフトドリンクがあるわよ」と、今度はソフトドリンクが出てくるわけです。私は、「いやいや、今はのど渴いていないから」と言ったのです。すると、「それじゃ、何かちよつとつまむ？」と、今度はつまみが出てくるわけですね。私が、「いや、今はおなかもすいていない」こう言ったのです。それで困ったなと思っていたら、女性が、「じゃ、ちよつと失礼して私は寝巻に着替えるわ」と言ったわけです。それで、私の前で脱ぎ始めたのです。私は、これはいけないと思って外に飛び出した。「何で出るの？」と言われたのですが、飛び出した。何故飛び出したかという、これは当時のインテリジェンスの世界では常識ですけれども、私のあてがわれたコンパートメントというのは、必ず隠しカメラがあったのです。これは常識です。隠しカメラが密かにいろいろな写真を撮る。それではまった人がたくさんいるのです。私は女性が脱ぎ出したときに、これは危ない、隠しカメラが作動するに違いないと思って

すぐ出たのです。向こうが裸かネグリジェ姿で、私と一緒に撮った合成写真で、どういう写真をつくられて、私がゆすられるかわからないわけです。事実、そういう形で私のようなことで、若い女性の仕掛けた「罟」にはまった西欧の外交官は少なくありません。ということで、私もまさにモスクワでこのインテリジェンスの活動、工作の対象になったという話です。

モスクワでの体験 その2 — 渡りかけた危ない橋

次に、「渡りかけた危ない橋」。これは全く逆の話でありまして、私が図らずもインテリジェンスの対象の主体側に立ちかけたという話です。今日は一つだけお話しします。福岡先生からご紹介がありましたけれども、私はモスクワに2回行っております。63年から66年、74年から78年近くまでと、約7年近く住んでいます。さっきの話は最初のモスクワ生活、今度の話は2回目のモスクワ生活の話です。家族もできて子供もおりましたので、モスクワから40キロ以遠には出られないという、缶詰のような状態から逃れるために、西側の外交官は、ヨーロッパのどこかに行って夏休みを過ごすというのが慣例でした。日本大使館はフィンランドに別荘を借りて、多くの館員がそこで夏休みを過ごすというのが慣例でした。私も家族を連れて自動車でレニングラードからフィンランドの国境を越えて、そこに夏休みに行った帰りの話であります。

当時のソ連とフィンランドとの国境というのは、まさに西側に接する国境地帯ですから、ソ連側は大変に厳しい国境の管理体制をしいておりまして、国境から大体20キロの中は、ソ連の普通の人々が住むことは許されず、したがって無人地帯です。ソ連の国境のチェックポイントをフィンランド側から通過しますと、それからはもう一本道、途中止まっても休んでもいけない、それから横道に入るのも厳禁です。そういう厳しいお告げを国境で言い渡されるわけです。ひたすら走り続ける。ほとんど普通の車は走っていない。走っているのは国境警備隊の監視車だけです。そこで私はソ連

領に入って、その道を運転し始めたのですが、途中で用を足したくなったのですね。これはもう緊急事態です。そこで止むを得ず車を止めまして、家族を待たせて、もし国境警備隊が現れても、ありのままを言うしかないと思って、森の中に入ったのです。森の中に入っていったら驚いたことに、そこに「こも」をかぶった大きな何物かがあるわけです。それでよく見たらそれが戦車なのです、しかもソ連の最新鋭の戦車です。これが「こも」をかぶせて置いてあるのですね。これはソ連の兵隊が近くにいるのではないかな、私もはっと思ひまして、そそくさと用を足して車に戻った。すぐに走り出そうとエンジンをかけた時、たまたま私の車が止まったところに、たしか白と赤だったと思うのですが、まだらにマークした杭が立っているのが目にとまったのですね。それで走って行くうちに、同じ杭が結構定期的に目に入ってきた。そこで私はちょっとスケベ根性を起こして、「ははあ、この杭が立っているところは戦車が隠してある場所なのかな」と思ったわけです。欲が出るのですね。もう1回用を足したくもないのに、小用を足すふりをして、その杭のところまで止まって、林の中に入っていったのです。そうしたら戦車がまたあったのです。戦車が隠してあった。そこで私は、この小さな標識は戦車が隠してあるところに立っているのだな、ということ、ある程度確認した。

それでモスクワに帰って、この話を防衛庁から来ている大使館の防衛駐在官に話したのです。そうしたら、「それは大変おもしろい、この話をフィンランド大使館の武官に話してもいいですか」と聞かれたので、「いいですよ」と答えた。そうしたらフィンランドの武官が、早速フィンランドの国防省と連絡して、密かにいろいろな形で点検したら、まさに私が気がついたように、この杭があるところに戦車が隠されていることを確認したのです。それで、後から私はフィンランドの軍当局から感謝されたわけです。ですから、たまたま私はインテリジェンスの主体になるという、積極的な意思は全くなかったのですけれども、そういうことでインテリジェン

外交とインテリジェンス

スの主体になりかけた、というケースなのです。これも現場で見つかれば、ソ連はそれに言いがかりをつけて、私はスパイだということで、国外追放になった可能性もあった話です。幸いにその後ソ連から、これでゆすられるということはありませんでした。これが「渡りかけた危ない橋」という、もう一つの体験です。つまりインテリジェンスの対象の客体にもなり、主体にもなったという、私自身の経験であります。

2 外交とインテリジェンス — わが国の体制

外務省の体制

次は「外交とインテリジェンス — わが国の体制」に移ります。皆さんは私の話を聞かれて、日本外務省もソ連関係の仕事に携わる者に対しては、そういうインテリジェンスについての研修といいますか予備知識を与えていたに違いないと恐らく思われるでしょう。しかし、驚かれると思います。私は外務省生活40年の間に研修というコースの中で、あるいは上司がインテリジェンスということについての忠告、助言 — 例えば「女に気をつけろよ」ぐらいのことはありましたけれども、組織的に研修を受けたことは一度もありませんでした。全くゼロです。その話をすると、欧米の外交官は信じられないといって驚きます。ソ連を専門にする日本の外交官がそういう研修を全く受けていないとは信じられないとよく申しますが、それが現実でありました。

なぜそうなのか、これがやはり戦前の暗い歴史、特高警察その他という、いろいろな暗い歴史というものがあって、戦後の日本ではインテリジェンスということが厳しくタブー視された時代が続いてきたということに、私は最大の原因があると思うのです。私は、ソ連関係の仕事に40年間を費やすことになりましたけれども、その間、外務省の欧亜局というところが私がほとんど過ごした組織でした。そこの担当官、ソ連課長、欧亜局参事

官、欧亜局長というような職にあるときに、ワシントンに出張しますと、ソ連についてのいろいろな情報を集めるということが最大の仕事の一つでありました。私はワシントンに行くたびに CIA 本部を訪ねて、私のカウンターパートと会って、ソ連について CIA が日本に教えてくれる範囲の情報を集めるということが私の仕事の一つになっておりました。そのときに、たまたま私が英国の陸軍学校でトレーニングを受けたことが大変プラスになりました。CIA は人を見て判断します。この人は信用できると思ったら、ある程度仕事面も協力してくれるし、情報もくれる。しかし、やはり情報というのはギブ・アンド・テイク、この原則は非常に厳しいです。ですから、ただ「教えてくれ、情報をくれ」だけでは、なかなか向こうも教えてくれない。何をギブするかということが、私の悩みの一つでもありました。

当時は、アメリカが欲しがっていた情報の一つは、日本のナホトカ総領事館がもっていた情報でした。あの周辺の情報は、アメリカは一切得られない。アメリカはあそこに総領事館はない。そのナホトカ情報というのが私の売り情報の一つでありました。それから北方領土水域、根室、その周辺地域、そして北海道に対してのソ連のいろいろな形の工作活動にも CIA は関心がありました。そういう情報を売りにして、その代わりに CIA が集めたいろいろな情報をできるだけ取るということが私の一つの仕事でありました。

このような CIA との協力関係は、私が外国に勤務しても続きました。例えば、フィリピンの大使館で次席（ナンバー 2）として勤務していた時には、CIA の本部から連絡をしてもらって、マニラのアメリカ大使館の CIA の責任者、チーフとの接触を始めるのです。当時、アメリカはフィリピンに最大の空軍基地と海軍基地を設けていた。ソ連は、そのフィリピンを何とかできないか、いろいろ工作を始め出していた時でした。当時、ソ連は太平洋地域にどんどん出てきて、太平洋諸島にも潜水艦が出没する、

あるいは太平洋の小さな島にも、いろいろな形でアプローチを始めていた時代であります。そこで私も、ソ連がフィリピンで何をしようとしているかということは、日本にとっても非常に重要な問題であるという認識に立ちまして、フィリピンでのソ連の動きを観察し、情報収集に努めました。マニラ大学というのは、フィリピンの最高学府でインテリが集まる場所です。そのマニラ大学の当時の学長やインテリ学生に対して、ソ連大使館の文化部が、非常に巧妙なアプローチをいろいろしているという事実をつかみました。私は日本大使館の文化活動の一環として、そういうところにもできるだけ入って行って、ソ連が何をしようとしているのかということを探る。あるいはイメルダ夫人の動向を探る。当時はマルコス大統領の全盛時代ですね。イメルダ夫人もソ連の工作に乗って、フィリピンの若いピアニスト等をモスクワに留学させる。そうすると、ソ連はこの留学生を優遇して、小さなコンクールで優勝させたなんていうことがあるわけです。

そのようなことをして、ソ連が積極的な工作をしているということを知りまして、そういう情報収集に当たる。アメリカのCIAのチーフには、そういうことを教えてあげる代わりに、日本大使館が入手できないソ連の軍事的な動きというものを、私は情報として取る。これがギブ・アンド・テイクですね。

ポーランドに勤務したときも、ちょうどソ連が崩壊して、ポーランドの秘密警察が親分のKGBに反旗を翻して緑を切ろうとした、そのおもしろい過程を、ポーランドのアメリカ大使館にいたCIAのチーフと情報交換しながら、ずっと見つめていたという経験があります。このように、私が勤務した大使館の先々でCIAのチーフと仲よくなって仕事をしたというのは、これはあくまでも個人ベース、個人の責任負担でやったことなのです。外務省として組織的にやったことではありません。自分のソ連に対する仕事をより適切に、あるいは情勢判断を適切にするためには、やはりアメリカのCIAが集めているソ連についての情報には非常に貴重なものが

たくさんありました。そういう情報を取るために、私はそういうことをやってきたわけでありませう。

外務省には体制としてインテリジェンスというものを組み込んだ組織というものは、長い間ありませんでした。では、厳しい冷戦の中で、わが国が、国としてそういうインテリジェンスということに対して、全く無為無策だったのかといえば、それは、そうではありません。私はたまたまソ連関係を担当して暗中模索の中で、自分なりに CIA とコンタクトをつけてやってきましたけれども、各国の外務省は、そういうインテリジェンス情報を集めて分析するという部局を大体持っているのです。その部局が互いに意見交換する、情報交換する、あるいは相互訪問をして、いろいろな意見を交えるということは、ルーティーンでやっているわけです。ところが、日本の外務省にはしばらくそういうものはなかった。しかし、外務省の中で、静かにこつこつと、目立たない形でそういう部屋を事実上つくり、それを管理し、そしてやがては情報調査局という、局に育て上げたのです。しかしその情報調査局をつくったときも、「これはインテリジェンス組織」なんて言えないわけです。言えないが、実際はそういうものであった。現在は国際情報統括官組織なんていう名前に変わったようですが、実態は同じです。外務省でもやはり本当の外交を推進していくためには、タブー視されてはいるけれども、実際にはそういう組織を持って対応せざるを得なかったということがあるわけです。

他の関係省庁の体制

他の関係省庁も同じでありまして、例えば、警察庁です。冷戦時代でありますから、主としてソ連の外交官、東欧の外交官が主たる対象になっていたわけでありませうけれども、この中には皆さんもときどき新聞などでごらんになった記憶があるかもしれないけれども、KGB という諜報組織があります。それから、ソ連の場合は、軍の諜報組織が全く分かれて独立し

ているのです。それをGRUと呼んでいましたが、この二つが外国にいろいろな肩書のオフィサーを派遣している。その人たちが大使館員として来る場合もあるし、ジャーナリスト、特派員という形で来る場合もありますし、貿易通商代表部のビジネスマンとして来る場合もあります。そういう形で入り込んできて、いろいろ諜報工作をする。では、日本はインテリジェンスはタブーだから、それに対してただ無為無策で黙っているのだろうか。そんなことはありません。その点については、外務省が情報調査局をつくったのと同じように、警察庁もかなり早い段階から、これについての監視体制、そういう組織・人材の養成を着々と進めてやってきています。警察の中にそれを担当する部局を設けて対処してきている。しかし警察庁も、それがインテリジェンスの部局であるとは今まで口が裂けても言ったことはない、と思います。

あるいは、法務省というと、全くそんなこととは関係ないと皆さん思われるかもしれませんが、法務省の組織をよくごらんになると、公安調査庁という、恐らく皆さん何をやっているだろうと思われるところがあるのでですね。ここも実はインテリジェンスと関係ある組織なのです。

私の仕事の関係でいえば、さっきちょっとお話した根室地域、ここは旧島民、あるいは漁民が、北方4島周辺にぎりぎり危ない思いをして魚をとりに行くわけです。そして捕まる。今年の夏も銃撃されて、一人射殺されたという事件が起きましたけれども、これは、もうずっと起きている。射殺されたことは50年間なかったので大きな騒ぎになりましたけれども、拿捕され、裁判にかけられ、船を取り上げられて、損害賠償、賠償金を取られるという事件は沢山ありました。その中で、ソ連は「こいつは役に立ちそうだ」という漁民については、こっそり魚をとらせる。その代わりにソ連の欲しい情報を持ってこさせる。例えば、よく持っていかされたのは、北海道の自衛隊に関する資料であります。一見何でもないのですけれども、自衛隊に関する資料を持ってこいと言われる。それを持っていきます

と、こっそり北方4島の禁漁水域の中で魚をとらせてもらえる。この魚を持って帰って売れば大変儲かる。これをルポ船と呼んでいたのです。さっき申し上げたように、これをどういうふうにもソ連はやっているかということ、静かにフォローしているのは公安調査庁です。あそこは、日本から見ればいわゆる日本の領土ですけれども、事実上はソ連の施政権下にあるところです。ですから、出入国という観点からもとらえる必要があるわけです。

あるいは、もっとはっきりしているのは防衛庁です。冷戦時代には、東京急行といって、頻繁に日本の領空すれすれをソ連の偵察機が飛んで来るのです。そのたびに自衛隊機がスクランブルをかけて上がっていくわけですけれども、それによって日本の電波システム、防空体制の探知をしているといわれていたわけでありました。

皆さんご記憶かと思えますけれども、サハリン上空で大韓航空機が撃墜されました。当時、大変なニュースになりました。アメリカから韓国に向かっていた大韓航空機が、航路を間違えてサハリン上空——これはソ連の領土ですね——を通過しようとした。そこで撃墜されたのです。当時、ソ連の最初の発表は、「いや、これは間違って、誤射によって警告弾が当たってしまった」という説明をしたのです。しかし、実は自衛隊が、大韓航空機を追尾していたソ連の空軍、2機か3機いたわけですが、その空軍の責任者がウラジオストックと交信をしていた状況を全部把握していたのです。ソ連空軍パイロットは逐一報告をして、どうするか、どうしたらいいかと交信していた。自衛隊が北海道のあるところからこの交信を盗聴する、それを録音するというをやっていた。これはインテリジェンス活動です。これを長年やっていた、それで記録があったのです。その記録の中に、明らかにソ連当局の方から「打ち落とせ」という明確な指示が出ているわけです。パイロットは地上からの「打ち落とせ」という指示に基づいて、ミサイルを発射して打ち落とされたわけです。これは確たる動かない証拠な

のです。日本も最初は、これを公表していなかったのですけれども、三木内閣のとき、いろいろないきさつからこの情報を出しちゃうのですね。これはインテリジェンスの世界では到底考えられないことなのです。情報源を明かさないとすることは、これはインテリジェンスの世界のイロハの「イ」なのです。ですから、これが明らかにされたときに、世界のインテリジェンス・コミュニティは驚いたのです。「へえ、日本はこんなことをするのか」と。そこにはアメリカが介在していた節もあるのですけれども、それはともかくとして、それが出された途端にソ連は何をしたか、交信の暗号を全部変えました。つまり、自衛隊がソ連との交信のスクランブルを解読していたということがわかったものだから、全部変えたのです。それで自衛隊は交信が解読できなくなりました。

防衛庁はそういうことで事実上のインテリジェンス活動をしているわけなのです。そのほかに、例えば海上保安庁も、もちろん沿海の水域でスパイ船の監視などをやっている。そういうことで、タブー視されてはきましたけれども、わが国の中でもインテリジェンス・コミュニティというのは、事実上はあったのです。そして、現在もある。そういうことを公言すること自体も大変に問題があつて、なかなか言えないという時代が続きました。しかし、事実上のインテリジェンス活動は行なわれてきた。なぜかといえば、安全保障上、日本としてやらざるを得ない不可欠な対応だったからです。

冷戦構造崩壊後の対応 ― 米国の場合

しかし、冷戦が終わって、国際社会の構造は変わりました。9.11テロが起きて脅威というようなものが多様化してくる。例えば、9.11テロにしましても、国を超えた、ある集団、組織というような形をとってくる。国籍がない、どこにいるか場所をなかなか特定できないというようなことで、今までの脅威認識と相当に変わってくる。そこにさらに、これは北朝

鮮でいろいろ問題になっているわけですが、大量破壊兵器拡散防止ということが、もう一つの喫緊な問題になっている。そこで、アメリカもそうですし、イギリスもそうですけれども、世界のインテリジェンス・コミュニティは、この冷戦崩壊と新しい国際社会の脅威の出現、脅威の多様化ということにどう対処するかということで、一斉にインテリジェンス組織のあり方、制度の再検討に入りました。アメリカも冷戦終結直後から、そういう試行錯誤を始めました。しかし、9.11テロのときにアメリカの国内で起こった反応の一つに、「情報機関は何をやっているんだ」「インテリジェンス・コミュニティはこんなにお金を使って、こんなに人材を使って、9.11テロを全然察知できなかったのか」という批判が出たわけですね。

それから、もっと最近では、皆さんご承知のとおり、ブッシュ大統領が大風呂敷を広げて、イラクに侵攻したときに、これはインテリジェンスから得た情報ということでテレビで写されましたけど、国務長官が国連の安保理事会に出て、そして写真を示しながら、「このとおりフセイン大統領は核開発を進めている。生物兵器の開発も進めている。細菌兵器もつくっていると思われる。」と大見得を切った。アメリカのインテリジェンス・コミュニティが大統領に最終的に上げた情報、これがイラク戦争の一つの有力な手がかりになったといわれるわけであります。これはご承知のとおり、間違っていたということが最近わかったのですね。そこで、アメリカではさらにインテリジェンスというもののあり方について、非常に厳しい批判、意見が出ました。その結果、2004年の暮れでありますけども、「インテリジェンス組織改革法」という基本的な法律ができました。そして、それと抱き合わせるように、その1年後でありますけど、「国家インテリジェンス戦略」というペーパーが出ました。私もこの「国家インテリジェンス戦略」を読みましたが、分厚いものですが、どのようにしてアメリカのインテリジェンスが再出発をしようとしているのか、その方向が示されています。

外交とインテリジェンス

この要点は、一言で言えば何なのか。結局アメリカのインテリジェンスというのは、これは私もいろいろ痛感したのですが、膨大な組織、すごい陣容、すごいお金を使っているのです。さっきちょっとお話しした、CIAの本部というのは本当に驚くぐらいの人材を使ってきた。しかしながら、肝心要の機会、例えば、イラク戦争のお話をしましたけれども——そのような時に、どうして最終的な判断が間違っただのかということについては、実は縦割り行政の問題、弊害というものがあるのです。従来から言われていた問題ですが、アメリカのインテリジェンス活動をやっている組織というのは、細かく分けると21か22あります。軍だけでも空軍・陸軍・海軍、みんな別々に持っているのです。CIAはCIAで持っている。これらが、相互に横の連絡なく、上に情報を上げていくわけです。しかし、それを統括し、判断する人が実際いなかった。インテリジェンス組織改革法2004年で何をしたかという、それを統括する情報の最高責任者、長官をつくったのです。初代長官に任命されたのがネグロポンテというイラクの大使をやった人でしたが、先週、ブッシュ大統領はイラク戦争の見直しということで、ネグロポンテを解任してしまった。そういうことでアメリカは何とか縦割り行政の弊害をなくそうと、今、非常に精力的にやっています。

わが国の場合

わが国も実は、インテリジェンス・コミュニティーが事実上あるというお話をしました。私はソ連課長、欧亜局長のときもいろいろなことで警察庁とも、防衛庁とも協議しましたけれども、わが国も基本的に同じなのです。警察がとってくる情報を、警察庁は外務省にも教えない、防衛庁にも教えない、そして上に上げるのです、直接総理に上げていこうという傾向が強いです。内閣調査室という組織があります。これはもともと、吉田茂内閣時代に緒方竹虎という官房長官が、CIAのような組織をつくらうと

言ってつくり出した組織なのです。しかしその後、長い間全く機能しなかった。この室長は警察から出して、ナンバー2は外務省から出すという伝統は続いていますけれども、インテリジェンス・コミュニティを一つにまとめる機能は全く果していませんでした。ソ連課長をしていたときも、何とかこの事実上あるインテリジェンス・コミュニティの横の連絡の会議をつくろうとしましたが、結論から申し上げるとうまくいきませんでした。お互いに各省庁のガードが堅いのと、冒頭にお話をしました、インテリジェンスということに対するタブー、警戒感というのが余りにも強くて、それは実現しませんでした。

でも、ここ本当に1～2年、特に安倍内閣ができて、防衛庁が防衛省になって、自衛隊のタブー視がだんだんと薄れていくのを見ながら、インテリジェンスに対するタブー視を何とか打ち破っていこうという、そういう動きが出てきているように見えます。安倍内閣以前から既に内閣情報会議、内閣情報合同会議といった組織が設立されています。

これは、ある意味ではイギリスの組織をまねたとも言われていますけれども、さっき申しました縦割り行政、横の連絡がない、外務省は外務省で集めてきた情報をなかなか警察庁、防衛庁、法務省等々にシェアすることはしない。どの省庁も同じということで、本当の意味での活動ができないという反省から、こういう組織がつくられたと聞きました。内閣情報会議というのは担当大臣が集まる会議、しかしこれは年に2回しかやらない。私の感じでは、これは全く機能していない。ただ大臣が集まって、当たりさわりのない会話をして終わり。意味があるとすれば合同情報会議、これは関係各省庁のインテリジェンスの担当局長が集まって、月2回やっているようですが、これも縦割り行政の弊害を正すということでは、ある程度意義があるかもしれませんが、本来の機能は果していません。私にはそう見えます。

その後に、人工衛星を日本も独自に持とうということで、ご承知のよう

外交とインテリジェンス

に内閣衛星情報センターというのができました。そういうことで、日本も防衛庁の防衛省への昇格、自衛隊に対するタブーがだんだんと薄れていったことと合わせて、安倍内閣もインテリジェンスをもう少し真正面から認めるという方向に動き始めているように見える。小池首相補佐官がアメリカに行ったり、いろいろなことで各国の諜報機関、インテリジェンス組織を勉強しているようです。小池首相補佐官はアメリカとはかなり違う英国方式が日本には適しているとの意見だと聞きます。

ビジネス・インテリジェンス

次に「ビジネス・インテリジェンスの発展」についてとりあげておきたい。1980年代の半ばからアメリカの大きなビジネスにとって、インテリジェンスの重要性が急速に認識されるようになった。いろいろな製品をつくる、競争会社も同様の製品を開発しようとしている。その情報を密かに入手できれば会社にとっては大変なプラスになるわけですね。あるいは会社がどういう経営方針でいくのか、ある国に工場をつくる、支店をつくる。あるいは増資をするというような、いろいろな情報はビジネスにとって非常に重要なわけです。あるいは人的な問題、そういうことを研究するビジネス・インテリジェンスというのは、1980年代からアメリカで非常に急速に発展しました。そして、それがだんだんとビジネス・インテリジェンスという一つの世界を形成していきます。さっき申し上げたような冷戦構造の崩壊ということに合わせて、本来のインテリジェンスの世界も変わろうとしている。

そこで、このビジネス・インテリジェンスと、それから本来のインテリジェンスという両方の世界で共通の問題点というのが相当出てきて、お互いに交流するようにもなっている。ということで、これを総合してコンピティティブ——競争ですね、コンピティッション（Competition）——コンピティティブ・インテリジェンスという言葉が登場しました。そこでい

ろいろな角度からインテリジェンスのあり方、技術上その他を学術的に検討していく、そういう方向も出てきています。ということで、官・民・学というような、いろいろな分野が協同して研究をしようという動きがアメリカ、フランス等を中心にかなり強くなってきています。それを受けてアメリカの大学院、フランスの大学院では、そういうインテリジェンス、コンピティティブ・インテリジェンスというものを、学問の対象として真正面から勉強していこうという、そういう動きも出てきているようです。残念ながら、さっきお話したような事情で、日本はまだそういうところまでは進んでいませんが、私の承知している限りでは、日本大学の大学院では既にそういう試みが始まっていると聞きます。

3 国家の指導者とインテリジェンス

時間がなくなりましたので、最後の課題に移ります。ここで、今までとちょっと違うような脈略で「国家の指導者とインテリジェンス」ということをとりあげることにしました。冒頭で、私はモスクワでインテリジェンスの客体にもなったし、主体にもなったという、私のささやかな体験談をお話しました。インテリジェンスの工作をする場合、相手に全く制限はありません。私のようなモスクワ時代の駆け出しのチンピラ外交官に対して、そういう工作をすることもあっても、国王、大統領、首相、外務大臣、大使、だれでも OK、この人はいけないというものはないのですね。ですから当然ながら、国際的なインテリジェンス活動、情報収集活動、工作活動の目標は、高い地位にある要人を狙うはずですね。

ブランド西独首相辞任事件

その具体例をいくつかお話して、私の申し上げたいことを、最後に結論として強調したい。具体例としてメモに三つ書きました。一つが、ブラン

ト西独首相辞任事件です。ブランド首相というのは、冷戦史の講義では必ずお話をするのですけれども、大変私の敬愛する、国際的に尊敬されている政治指導者です。冷戦時代に東ドイツと西ドイツは本当に真二つに分かれて、西ドイツは東ドイツを一切認めないという時代が続きました。そこに穴をあけて、より柔軟な姿勢に転じて、東ドイツの存在を事実上認めて、東ドイツと西ドイツの間に国と国とのつき合いを始めることによって、東西の冷戦構造の緊張緩和に大変貢献したということで、ブランド首相は1971年にノーベル平和賞をもらった人です。ちょっと話が飛ぶのですが、ポーランドでもブランドという人は大変に尊敬されている政治家です。なぜならば、ブランドは首相時代に初めてワルシャワに行って、ワルシャワのゲッター、ユダヤ人の共同墓地にひざまずいて、そこで花輪をささげて、謝罪の気持ちを率直に表明したということで大変有名になった人です。

そのブランドに長年仕えていたギョームという秘書がいたのです。この秘書が実は長年、東ドイツのインテリジェンス機関の一員であった、そしてブランド首相に集まってくる情報を、この東ドイツの情報機関に伝えていたことが判明しました。ということはどういうことかということ、情報は即 KGB に渡るわけです。東ドイツのインテリジェンス組織というのは、KGB 直属ですから、すぐにモスクワにその情報が伝わっている。気がついてみたらブランド首相時代の情報はほとんどモスクワに筒抜けだったということになったのです。これは大変な事件でありました。ということで、ブランド首相は大変に人気のあった首相ではありましたが、この事件が発覚してから2週間後、首相を辞めました。即座に国民に詫びて首相の座をおりたのです。そして自分は西ドイツという国家の尊厳を傷つけた、西ドイツの国益というものに計り知れない損害を与えたことに対して、お詫びをすると同時に、その責任をとって、政治から一切手を引くということをやった。これがギョーム事件、ギョームスパイ事件とも言われる事件

であります。

プロフェューモ—英国国防大臣辞任事件

その次に書きました「プロフェューモ—英国国防大臣辞任事件」、もう時間がなくなりましたので、これは詳しくは申し上げられませんが、英国の国防大臣がさつき言った女性問題、これをインテリジェンスの世界ではセクスピオナージュなどとも言われますが、このプロフェューモという英国の国防大臣が、やはりこのセクスピオナージュに引っかけかけたのです。キーラーという19歳のコールガールと密かにつき合っていた。英国のMI-6というインテリジェンス諜報機関、私はイスラエルとともに世界で一番すぐれていると思っていますけども、このMI-6が捜査中に、この女性がソ連のKGBにつながっているのではないかとという疑惑が持ち上がったのです。その内偵をしているときに新聞にすっぱ抜かれたのです。そうしたらプロフェューモ大臣は——この新聞ですっぱ抜かれた記事が正確な事実かどうかというのは、これは新聞が書いたことですから、だれも確認していないわけですね、確認していないけれども、プロフェューモは即座に大臣を辞任しました。そういう疑念を英国社会に与えたということだけで、自分はもうこれ以上政治家として、国防大臣として職務を続けられないと辞めました。そして辞任後は、言葉どおり政治から一切身を引きました。その後NGO活動——例えばアフリカの困った人たちを助けるとか、そういう活動、非政治的な活動を続けて、2年か3年前ですが、もう亡くなりました。そういう事件であります。私は何でそういう例を二つ言ったかというと、これは第3番目のわが国の元首相の問題が頭の中に常にあるからです。これは非常に微妙な問題であります。

わが国元首相への疑惑

最近亡くなられた元首相の某氏が中国の公安当局の女性、インテリジェ

ンス・コミュニティの女性と懇ろになったという噂はかなり前からあった。私は彼が首相になられる前からこのことが気になっていました。外務省の中国関係の私の同僚に聞きますと、ほとんど例外なく「あれは事実だよ」と言います。事情をよく知っている新聞記者に聞くと「あれは事実だ」とみんな言うのです。ところが、彼が首相になるかならないかという話題が持ち上がったときに、新聞社の幹部が事実だと言っているにもかかわらず、大新聞は全くこれを問題にしなかった。国会では2回ぐらい取り上げられたことがあるのですが、新聞ではほとんど報じられませんでした。唯一、産経新聞がちょっと事実を報道したことはありましたけども、それだけでした。こんなことがあっていいのか、世界の常識から著しく外れているのではないかと、そう思いました。さっきお話しした「ブラント西独首相を見よ、プロフェューマーを見よ、それと比べてわが国はどうなんだ」という声を挙げたのは、当時私の知る限りでは2人のジャーナリストでした。一人は櫻井よしこさんという評論家、そしてもう一人は加藤昭さん。櫻井よしこさんは『週刊新潮』だったかに、何回かこれを取り上げて、こんなことでもいいのかと糾弾されましたけど、結局、日本では国会も大新聞もテレビも、まともに問題にしませんでした。

その後、この中国女性は今まで一緒だった男性と別れて日本人と結婚するということで、裁判になるのです。この裁判の過程で、実はこの女性は中国の公安当局の女性であるという明確な証言も出てくるのですね。ですから、この女性はその筋の女性だったことは、私は個人的には間違いないのではないかと見ていますけども、いずれにしてもそういう経緯で、これはうやむやになった。

加藤昭氏はこの問題について、その後、中国に対するODAと関連づけて、かなり実証的に論証しています。それはともかくとして、この問題が事実かどうかというのは、私は勿論直接知っているわけではありません。しかし、こういう事態は世界中見渡しても日本しかないだろう、と私は思うの

です。彼が日本の首相になったときに、中国の公安当局は、これが事実なら、恐らく高笑いをしていたに違いないと、私は今でも思うのです。

おわりに

私はどうしてこの話をしたかという、一つは、ここにちょっと書きました日本の外交、これは今日の本題から外れますけど、日本の外交に何が欠けているか、という問題に係わるからです。私は、わが国は、日本という「国家の尊厳」について非常に感度が鈍いことを、外交官生活40年間に痛感してきました。シンガポールという本当に豆粒みたいな国が、なぜあれだけ国際社会で尊敬されるのか、経済超大国の日本が、ドゴール大統領から「ソロバンばかりをはじいている商人」と蔑まれるのかという問題であります。シンガポールは、小さい国ですけれども、国家の尊厳を傷つけられたときには、怒りを正当に表現して、断固反論し、行動する。ところが日本の場合はどうかということなのです。更に、今まで皆さんと一緒に考えてまいりました議論——インテリジェンスということがタブー視されてきたという、わが国の特殊な風土、これも実は、やはり関係があるのではないかと思うのです。

日本の大新聞、国会、学会にはインテリジェンスに対するアレルギー、これをタブー視する風潮が、今なお尾を引いている。日本の大新聞は、わかっているけど書かない。大新聞の編集の方と話す、「いや、おっしゃるとおりだ。しかし、わが社はそうはいかないんですよ」と言われる。そして更に、日本の国家の尊厳という次元でこの問題を考えるという発想も希薄であるということです。

上海の総領事館の電信官が中国のインテリジェンス当局に脅かされて自殺しました。そのときにわが外務省はどうしたか。一応、中国政府に抗議をした。それはそれでいい。しかし、インテリジェンスの世界で抗議をして「実はやりました」と認める国というのは、世界でゼロです。インテリ

外交とインテリジェンス

ジェンスの世界ではそんなことはあり得ない。インテリジェンスの世界では何をやるかという、もし上海の電信官がそういう形で犠牲になったら、普通、対抗措置としてやるであろうことは、日本でいろいろインテリジェンスの活動をしている人物、外交官や公安当局の要員、その一人を日本から国外追放するのが常識なのです。しかし、今の日本は中国に対してそんなことをとてもやりそうもない、それが現実であります。

ちょうど時間になりました。今日は教科書を離れていろいろお話ししました。教科書では「国際社会と法」ということをいろいろ勉強してきましたけども、今日は公開授業ということで、しかも私の7年間にわたる本学での講義の最後ということで、今まで一度もお話したことのない、そういう話をさせていただきまして、私の1年に亘りました「国際社会と法」の授業を閉じたいと思います。どうも長いことありがとうございました。(拍手)

追記

本講演記録は、兵藤長雄氏（本学現代法学部元教授）が、本学2号館B 301教室で行った2007年1月10日の「最終講義」を再現したものである。掲載にあたり、編集委員会の責任において修正を施し、本人の了承を得て原稿化した。